

後鳥羽院の『遠島百首』における「ふるさと」と李煜の宋軟禁時の
作品における「国」の比較考察

Comparison of the Portrayals of *Furusato* in Gotobain's
Entoo Hyakushu and *Guo* in Li Yu's Works during His House Arrest in
the Song Dynasty

黄 鶴翔 (Hexiang HUANG)¹

要旨

後鳥羽院（1180-1239）と李煜（937-978）は、君主としての経歴や趣味は類似している。後鳥羽院は和歌の再興や『新古今和歌集』の編纂など、日本の文学に貢献した。一方、李煜は南唐の最後の皇帝として詞（ツイー）の創作に取り組み、中国文学に大きな影響を与えた。両者は共に政治的に大きな脅威に直面し、悲劇的な運命を辿っている。両者の生涯には共通点があり、特に配流や軟禁後の作品にその苦悩や悲しみが反映されている。本稿では、後鳥羽院の配流された時の歌『遠島百首』と李煜の宋軟禁時の作品を比較し、後鳥羽院の「ふるさと」と、李煜の「国」といった描写に焦点を当てて考察する。また、後醍醐天皇と宋の徽宗、失敗した君主たちの作品を比較することで、彼らの特徴をより深く理解することを目指す。

キーワード：後鳥羽院、李煜、和歌、宋詞

Abstract

Gotobain (1180-1239) and Li Yu (937-978) had similar monarchical careers and interests. Gotobain contributed to Japanese literature through the revival of *waka* poetry and the compilation of the *Shin Kokin Wakashuu*. On the other hand, Li Yu, as

¹筑波大学人文社会ビジネス科学学術院 博士後期課程。メール：enbakoujyou@163.com.

the last emperor of the Southern Tang dynasty, focused on the creation of Song poetry and exerted a great influence on Chinese literature. Both men faced significant political threats and experienced tragic fates. In terms of their life similarities, their anguish and sorrow are reflected in their works, particularly after their exile and house arrest. This paper compares Gotobain's poem *Entoo Hyakushu* written during his exile and Li Yu's works from his house arrest in the Song dynasty. The focus is on Gotobain's portrayal of his *furusato* (homeland) and Li Yu's description of *guo* (country). It also examines the works of other failed monarchs, such as Emperor Godaigo and Huizong of the Song dynasty, in order to gain a deeper understanding of their unique characteristics.

Keywords: Gotobain, Li Yu, Waka, Song poetry

1. はじめに

承久の乱以後、後鳥羽院は出家し、隠岐島へと配流された。彼が隠岐島で詠んだ歌、特に『遠島百首』は、単なる題詠の歌に留まらず、感情を湛えた「実感の歌」²としての評価を受けている。中世以降、「実感の歌」としての認識が確立された『遠島百首』（『新編国歌大観』第十巻）には、後鳥羽院の深い内省が表現されている。例えば、「我こそは新島守よ隠岐の海の荒き波風心して吹け」（九七）は、『増鏡』³でも、後鳥羽院の在島時の心情を反映した歌と解釈された。また、吉野（2015）は、これらの歌が「隠岐に配流された後鳥羽院の体験という〈前提〉に深く根ざしている」との見解を示している。

後鳥羽院が隠岐島へ配流される途中の景色を回想した歌が、『遠島百首』（『新編国歌大観』第十巻）の中にある。次の一首を挙げる⁴。

²小島（1993）から実感の歌と認識された。寺島（2015）は題詠系譜と実感系譜が存在し続けると指摘するが、田口（2021）は「実感の歌」は全般的にとっても重要であり、両面から解読する必要があると述べた。

³『増鏡』（新島守）は「水無瀬殿おぼし出づるも夢のやうになん。はるばると見やらるる海の眺望、二千里の外も残りなき心地する、いまさらめきたり。潮風のいとちたく吹き来るを聞こしめして」とある。

⁴本稿にある歌番号および歌本文はオンラインデータベースである古典ライブラリーに記載されている『新編国歌大観』に基づく。筆者は漢字等の表記を一部改編した。以下同様。

ふるさとを別路におふるくずの葉の風はふけどもかへるよもなし

（四一）

くずの葉が風によって容易に裏返るが、彼の運命はまた、元に戻れない。それは「都への帰還は不可能になった」という現実を暗示する表現だと考える。特に、「ふるさと」という言葉の使用も注目すべきである。後鳥羽院はこの言葉を通じて、隠岐島と対照的な自身のかつての都、すなわち統治地を懐かしんでいる可能性がある。

また、『夫木抄』（『新編国歌大観』第二巻）の一首を挙げる。

承久後百首御歌 後鳥羽院御製

風はやみ隠岐こぐ舟のかぢ間にもわする間なきよよのふるさと

（雑 梶楫 一五八七〇）

「承久後百首御歌」の実態は不明だが、隠岐島で詠まれたとされる百首の御歌の一部と考えられている。この歌では、「隠岐」と「ふるさと」という言葉が対照的に用いられている。「よよ」は、「梶」によって浪が重なることを表す。また、「代々」を意味という意味で、天皇が代々統治してきた歴史への言及としても理解される。

そして、この歌の表現方法は、前例のないものであり、後の為家詠「ながむればよよのふる里さそひきてむかしの影にすめる月かな」（『新編国歌大観』第七巻『為家集』嘉禎元年住吉社三首 一七八四）に影響を与えた。為家の歌における「よよのふるさと」という表現は、平安時代後期の歌人たちによって崇拜された歌神を守る聖地としての意味合いを持っている。このことから、後鳥羽院の言う「ふるさと」も、後に為家が影響を受けた「よよのふるさと」も、単なる地理的な場所を指すのではなく、より深い文化的な価値を象徴していて、むしろ皇位や権力の中心、すなわち統治や文化的な影響力の象徴としての意味を持っていると解釈できる。

この解釈は、平安時代の社会や文化における、皇室の権力の象徴としての役割を深く反映していると考えられる。それに対して、中国の五代南唐（937-975）では、権力が失われて

「ふるさと」から離れる後鳥羽院と類似の経歴を持つ李煜（りいく）という人物もいる。

李煜は五代南唐の最後の皇帝である。太子の突然の死により、六男ながらも即位した。しかし、李煜は政治より文学の才能を持つ、彼は唐が滅ぼされた後、宋に軟禁された期間に多く詞（ツ）の作品を創り出した。後鳥羽院と同様に、即位に対して、コンプレックスの感情を持っている。

以下は李煜が創作した詞の中で特に代表的なものの一つが『破陣子』（王 2007: 47）である。

破陣子

四十年来家国	四十年来の家国
三千里地山河	三千里地の山河
鳳閣龍樓連霄漢	鳳閣龍樓は霄漢に連なり
玉樹瓊枝作煙蘿	玉樹瓊枝は煙蘿を作す
幾曾識干戈	幾ぞ曾て干戈を識りし
一旦歸為臣虜	一旦 歸して臣虜と為り
沈腰潘鬢消磨	沈腰 潘鬢 消磨しぬ
最是蒼皇辭廟日	最も是れ蒼皇たりし 廟を辞するの日
教坊猶奏別離歌	教坊は猶ほ奏す別離の歌
垂淚對宮娥	涙を垂れつつ宮娥に対せし

この詞は失われた国、過ぎ去った栄光に対する強烈な憧憬を描いている。「家国」は南唐である。「鳳閣龍樓」、「玉樹瓊枝」という言葉は「家国」を示し、もう一層の意味を添えればかつての土地や権力である。戦争に敗れた李煜は宋に送られることになり、音楽を教えるという「教坊」のところで、別れの歌が奏でられた。そして、彼が宮女に向けて涙を落とした。

自らの「国」から離れたくないという感情から見ると、後鳥羽院と李煜は共通している。さらに『遠島百首』に登場する「ふるさと」という言葉も同様の意味を含んでおり、歌の中で使用されていたと考えられる。

『詩経』の小雅「北山」における「溥天之下 莫非王土 率土之滨 莫非王臣」の思想は、そのまま日本でも「王土思想」として認識され、平安後期に王朝政権が危機に直面した際にその思想が強調された。例えば、後白河院が発布した「保元新制」（1156年）の第一条には「九州之地者一人之有也、王命之外、何施私威」（『兵範記 二』保元元年閏九月十八日条）とある。この王土思想は、中世の天皇権力の基本理念として機能した（『日本大百科全書』（1994）「王土思想」）。

さらに、隠岐島は流刑地として認識され、国の境界と位置づけられた。中世の領域認識では、東は外浜、西は鬼界島と呼ばれ、王国の境界を示した⁵。「外浜」の起源も、「率土之滨」から来ており、王国の境界を示すものである⁶。この境界地に住む人々は、「境外性と境内性を兼ね備えた」と認識され、非王土の側面も持つ。

そして、中世の領域認識は浄穢観や身分制、天皇制と関連しており、天皇から遠ざかるほど穢れが強調される「同心円」構造の領域意識が存在した（黒田 1975）。穢れを排除する行為も、天皇から国家四至外へと広がる同心円の意識に基づいた（伊藤 2016）。しかし、承久の乱以後、「天皇の支配権はすでに東国に及ばず」という王権が衰亡する危機感が存在し、「当時にとっては天皇制を瓦解させる可能性もあった」（網野 1986）。天皇の配流はその重要な出来事の一つであった。

王土から離れた後鳥羽院は、自身の歌において君主としての経験や失われた自身の権力に対する思いを表現していたと考えられる。『遠島百首』に登場する「ふるさと」も、統治した王土の全域を指す可能性がある。この論文では、後鳥羽院の『遠島百首』における「ふるさと」と李煜の「国」という表現に焦点を当て、比較研究を行う。

⁵例えば『曾我物語』巻三「左御足踐奥州外浜、右御足踐西国鬼界島」とある。

⁶「新編弘前市史」編纂委員会編集（2003）「鎌倉幕府の東夷成敗権と得宗領津軽」で詳しくは「外浜」の起源を紹介した。

2. 『遠島百首』における後鳥羽院の歌表現について

2.1 『遠島百首』の表現の特徴

後鳥羽院が隠岐で詠んだ『遠島百首』は、隠岐でび詠歌のうち、唯一百首の全貌が見られる。その時代において特に技巧的とは言えないと安田（1960）は指摘した。小島（1993）も同様に、この歌集は「御実感の日常の御感想をありのままに」、「巧まざる」と述べる。この百首は「実感」を基盤にしており、後鳥羽院の日常的な感情や経験をそのままに詠み込んだものである（吉野 2015）。

さらに、『遠島百首』は隠岐で詠まれたものであり、地域性を強く持っている。この百首のうち、九首が特定の地名を詠んでおり、その中で七首が直接「隠岐」に関連した歌となった。残りの二首は、「住吉」と「和歌の浦」を詠んでおり、これは都との関係を保つために詠まれたと考えられる（寺島 2015）。

2.2 後鳥羽院の「ふるさと」詠

後鳥羽院の「ふるさと」詠は、家集『後鳥羽院御集』に計三十九首が収録される。特に注目すべきは、十六首が「吉野」と「志賀」を詠んだ歌であり、更に十四首が「ふるさと」の「月」を詠んだ歌であるという点である。このような特徴を持つ詠歌が半数以上を占めていた。しかし、『遠島百首』の「ふるさと」詠では、吉野や志賀の地名を含まず、「月」についても描写されていない。そのため、『遠島百首』の「ふるさと」詠は、他の歌とは異なる、非王土の側面も持つ境界に住む意味を示唆していると考えられる。

2.3 『遠島百首』における「ふるさと」詠の考察

『遠島百首』（『新編国歌大観』第十巻）には、「ふるさと」をテーマにした五首の歌が含まれている。最初の夏の歌は次に挙げる。

ふるさとをしのぶの軒にかぜ過ぎてこけのたもとにほふ橘

(二二)

「こけのたもと」が僧の法衣を象徴し、後鳥羽院の出家後の隠岐での暮らしを表現する。「にほふ橘」は、『古今集』（『新編国歌大観』第一巻）「五月待つ花橘の香をかげ

ば昔の人の袖の香ぞする」（夏 一三九 詠み人知らず）や『新古今集』（『新編国歌大観』第一巻）「かへりこぬむかしをいまとおもひねの夢の枕ににほふ橘」（夏 二四〇 式子内親王）といった歌に由来し、懐かしさと寂しさを同時に表現した。また、忍草と苔は自然の変化や結びつきを象徴した。

ふるさとを別路におふるくずの葉の風はふけどもかへるよもなし

（四一）

後鳥羽院が隠岐への旅を思い起こし、秋の風が「ふるさと」である葛の葉を吹き返す情景が描かれている。本歌は「わするなよわかれぢにおふるくずのはの秋風ふかば今帰りこむ」（『新編国歌大観』第一巻『拾遺集』別 三〇六 よみ人しらず）と考えられる。歌は、都への帰還は不可能になった」という現実を暗示する表現だと考える。また、『増鏡』では「初秋風の立ちて、世の中いとど物悲しく、露けさまさに、いはん方なくおぼし乱るる」と悲しい秋の情景が語られ、失望感が表現される。

おもひやれいとど涙もふるさとのあれたる庭の秋の白露

（四五）

「おもひやれ」は都にいる家臣たちに想像を促す意味を持つ。また、後鳥羽院の涙が「ふるさと」の白露になり、久しく帰らずにいたことで庭が荒れたことを表現した。

ふるさとのひとむら薄いかばかりしげき野原とむしのなくらむ

（四六）

繁茂した「ふるさと」が野原に変わり、虫の鳴き声が響いている様子を描写した。「なく」は「泣く」の意味も含まれ、「ふるさと」への深い思いや寂しさが感じられる。この歌は『古今集』（『新編国歌大観』第一巻）「きみが植し一むらすすき虫のねのしげき野辺ともなりにけるかな」（哀傷歌 八五三 御春有助）を基に、荒れた旧居の主がいない寂しい状況を表現した。また、寺島（2015）は歌について「失われた旧居の景色が具体的に思い起こされる」と指摘した。

そして、次の歌「野べそむる雁の涙は色もなし物おもふ露のおきの里には」（四七）では、「おき」は「置き」と「隠岐」を掛けて詠んだ。「ふるさと」は「隠岐」と関連し、現実を直視した苦しさを表す（寺島 2015）。

ふるさとの苔の岩橋いかばかりおのれあらでも恋ひわたるらん

（九五）

「ふるさと」の苔むした石の橋が荒れてしまっても、恋は続くという意味が込められている。この歌は恋愛の歌と受け取られることもあるが、後鳥羽院の心情や思いが「ふるさと」の石橋に託されているとも捉えられる。

以上、「ふるさと」という言葉は、後鳥羽院の『遠島百首』において、特に意味の深い表現となった。この表現は、主に「隠岐」と深い結びつきを持ち、郷愁や懐かしさ、自然とのつながり、そして荒廃への変化を表現した。同時に、後鳥羽院の隠岐への配流や地位の喪失など、彼の個人的な経験や感情もこの言葉に反映された。

さらに、後鳥羽院の「ふるさと」という言葉の意味を理解するため、和歌史におけるこの言葉の表現を見てみよう。通常、「ふるさと」という表現は、歌で古い都や離宮を指し、その場所の荒廃や過去の栄光を想起させる。たとえば、平城天皇の歌「故郷となりにし奈良の都にも色はかはらず花は咲きけり」（『新編国歌大観』第一巻『古今集』春下九〇）は、遷都後の旧都奈良を指す。同様に、「芳野山花のふるさとあとたえてむなしきえだに春風ぞふく」（『新編国歌大観』第一巻『新古今集』春下 一四七 良経）、「誰すみて誰なかむらん故郷の吉野の宮の春の夜の月」（『新編国歌大観』第四巻『金塊集』一〇〇）も吉野を指す。後鳥羽院も「みよし野の宮のうぐひす春かけてなけども雪はふるさとの空」（『新編国歌大観』第三巻『後鳥羽院御集』一四五五）を詠んだ。

しかし、配流後の『遠島百首』における「ふるさと」という表現は、特定の旧都を指すものではなく、むしろ「隠岐」との関係を示した。このため、「ふるさと」は旧都を指すのではなく、現在の都を指す可能性がある。しかしながら、承久の乱後には都は戦火を逃れ、後堀河天皇が即位し、遷都も行われなかったため、都は荒廃していなかったことが分

かっていた。このように、「ふるさと」の意味は、本来は住んでいた所を指す言葉だが、「荒廃した旧都の意で吉野を「故里」とよむのだといふやうに、自己とは直接関係をもたぬ所をもさす語として用ゐられる場合が出てくるのである」（増田 1977）といった意味で使われることもある。

したがって、「ふるさと」という言葉は特定の旧都や以前の居住地を指すものではなく、むしろ荒廃や過去の栄光を意識した表現が見られる。後鳥羽院にとって、「ふるさと」は都の荒廃を描写するよりも、象徴的な意味を含むと考えられる。隠岐は権力が失われた境界地であり、「ふるさと」は統治の範囲内という境内地として関連づけられる。

3. 宋に軟禁された李煜の詞の表現について

3. 1 宋に軟禁された李煜の詞の特徴

李煜の詞は、宋に軟禁された時期に多く創作されたもので、「詞の本色」⁷や「赤子の心」⁸と評価される。これらの詞は、李煜が経験した感情や体験に基づいて、実際の経験から生まれたものとされる。この点は後鳥羽院の『遠島百首』とも共通する。

3. 2 李煜の「国」の表現について

李煜の詞は約四十一首（残篇あり）が残されているが、十一首は宋に軟禁された時期に創作された。うちの五首は「国」を表現した。まず、『破陣子』（王 2007: 47）を取り上げる。

破陣子

四十年来家国	四十年来の家国
三千里地山河	三千里地の山河
鳳閣龍楼連霄漢	鳳閣龍楼は霄漢に連なり
玉樹瓊枝作煙蘿	玉樹瓊枝は煙蘿を作す
幾曾識干戈	幾ぞ曾て干戈を識りし

⁷ 『白雨齋詞話』巻一 原文は「後主詞思路凄惋、詞場本色」とある。

⁸ 原文は「詞人者、不失其赤子之心者也。故生於深宮之中，長於婦人之手，是後主為人君所短處，亦即為詞人所長處」とある。また詹（1958）は「自然真率，直写感觀」、「李煜所有的詞都是從自己的親切感受出發」とある。

一旦帰為臣虜	一旦 帰して臣虜と為り
沈腰潘鬢消磨	沈腰 潘鬢 消磨しぬ
最是蒼皇辞廟日	最も是れ蒼皇たりし 廟を辞するの日
教坊猶奏別離歌	教坊は猶お奏す別離の歌
垂涙対宮娥	涙を垂れつつ宮娥に対せし

「家国」とは、彼が統治した南唐を指す。「辞廟」は前例の見られない表現である。

「廟」とは祖廟や朝廷を指すことが多く、李煜が自身の治世を象徴する場所から離れ、国が滅んだことを宮女に涙ながらに告げる場面が描かれた。これは、自らの治世の終わりと国の滅亡を暗示しているものと考えられる。

次に、『憶江南』（王 2007: 32）の二首を考察する。

憶江南

閑夢遠	閑夢 遠し
南国正芳春	南国 正に 芳春
船上管弦江面緑	船上に管弦あり 江面は緑なり
満城飛絮混輕塵	満城の飛絮 輕塵を混じ
愁殺看花人	愁殺す 看花の人を

「閑夢遠」から窺える李煜の詞は、夢の中で「南国」を回想するものであり、春の風景が描かれている。「南国」の繁栄と文化の豊かさを思い出し、特に春の風景を夢の中で再現したことが伺える。また、彼が戦争のない平和な時代や「南国」の文化の栄えを懐かしんでいる様子が詞に表現されている。

憶江南

閑夢遠	閑夢 遠し
南国正清秋	南国 正に清秋
千里江山寒色暮	千里の江山 寒色暮る
蘆花深处泊孤舟	蘆花深き処に孤舟を泊すれば
笛在月明楼	笛のねは月明の楼に在り

「孤舟」と「月明楼」は張若虚の『春江花月夜』の「誰家今夜扁舟子 何処相思明月楼」とも関連がある。この詞において、「孤舟」は比喩的に用いられ、李煜が国から離れた場所にいることを象徴し、故国への思いを表現している。そして、「笛の音」は月明かりのある高い楼閣から響いている様子が描かれている。また、「南国」の秋の風景は美しくも寂しげであり、李煜の心情と共鳴しているように感じられる。この風景や音によって、彼は過去の出来事を思い出し、詞に表現した。

『憶江南』の二首目の詞は、李煜が夢の中で故国の春と秋の風景を回想し、その美しさや繁栄を詞に詠み込む。しかし、「閑夢遠し」という一節が詞の雰囲気の特徴づけ、寂しさや哀愁をも漂わせる。李煜の心情や南唐という故郷への郷愁も詞に表現された。

南唐は主に長江以南の地域を統治しており、李煜が宋に軟禁された際、首都の開封（河南省）へ移された。したがって、この詞の「南国」は実際には南唐を指すことがわかる。

菩薩蛮

人生愁恨何能免	人生 愁恨 何ぞ能く免がれん
銷魂独我情何限	銷魂す独り我れのみ情い何ぞ限りあらん
故国夢重帰	故国 夢に重ねて帰り
覚来双涙垂	覚め来り 双涙が垂る
高楼誰与上	高楼 誰と与に上るか
長記秋晴望	長へに記す 秋晴の望め
往事已成空	往事 已に空と成り
還如一夢中	還ほ 一夢の中の如し

『菩薩蛮』（王 2007: 30）は、人生の苦悩や心の哀しみについて嘆く詞である。彼が避けられない「愁恨」と「銷魂」といった感情を表す。夢の中で「故国」へと戻り、現実に戻ると涙を流す場面が描かれた。南唐の宮廷で過ごした日々の美しい秋の景色を懐かしみつつも、高楼に登る仲間もおらず、孤独さを感じられる。そして、「還如一夢中」という

句は、過去の出来事が既に虚無と化し、夢の中でしか存在しないと感じていることを表現する。この「故国」は滅亡した南唐を指し、かつて彼が暮らした場所でもある。

虞美人

春花秋月何時了	春花秋月 何時か了まる
往事知多少	往事 知んぬ多少ぞ
小楼昨夜又東風	小楼に昨夜又た東風
故国不堪回首月明中	故国は回首するに堪へず 月明の中

彫闌玉砌依然在	彫闌 玉砌 依然として在るに
只是朱顏改	只だ是れ朱顏のみ改まりぬ
問君能有幾多愁	君に問う 能く 幾多の愁い有りやと
恰似一江春水向東流	恰も似たり 一江の春水の 東を向して流るるに

『虞美人』（王 2007: 40）は、永遠に続く「春花」や「秋月」と自らの過去の出来事を思いながら、自身が軟禁された場所である「小楼」で故国のことを懐かしみ、それに対する悲しみを歌った。「彫闌玉砌」は南唐の宮廷を指し、彼が離れた後も変わらず存在している様子を想像する。「朱顏改」は年月の流れや自身の年を感じ、昔と今の対比を通じて「故国」への強い思いを表現した。

上述の五首の詞では、「故国」という言葉は南唐を指している。李煜は過去の思い出にしばしば思いを馳せ、その対比を通じて感情を吐露した。また、彼の詞における「夢」という表現は、作品の中で空虚さや一時的な存在感を象徴する。たとえば、『憶江南』や『菩薩蛮』の中で用いられる「夢」は、彼が過去の出来事を回想する際に、それらが一時的であり、実際の存在感を持たないことを示唆する。特に、『菩薩蛮』の詞における「往事已成空 還如一夢中」という表現は、李煜にとって「国」が既に虚無で「夢」のように感じられるものであることを暗示した。この表現から、彼の心には「国」への帰還の希望がないことが窺える。彼の詞は国への郷愁を背景に、現実との対比やその儚さを強く感じさせるものとなった。

4. 比較検討

後鳥羽院と李煜は、彼らの歌や詞を通じて「ふるさと」や「国」への思いを共通して表現した。両者は過去に住んでいた場所や出身国を回想し、離れたことへの感情を詩や歌に込めた。現在の自分がその地域に所属していないことを感じ、以前の自分が属していた場所への思いを抱き、懐かしさや悲しみを表現した。

彼らにとって、「ふるさと」や「国」とは、単に生活していた場所だけではなく、統治した権力の象徴や統治した国全体を指すこともある。君主としての視点から見ると、彼らの歌や詞にはそのような権力や国家全体への愛着や郷愁が表わされている。

さらに、その特徴を詳しく見るために、後世の君主たちへの影響から検討する。後鳥羽院から後醍醐天皇に影響は引き継がれた。後醍醐天皇も倒幕計画に失敗し、隠岐に配流されたが、後に脱出して都に帰還した。その後、武家の反発により政治が不安定になり、後醍醐天皇は都を離れて吉野に移り、南朝を開くことになった。

後醍醐天皇が隠岐に向かう際の歌として、以下の歌（『新編国歌大観』第五巻）を挙げる。

さもこそは月日も知らぬ我ならめ衣がへせし今日にやはあらぬ

（『増鏡』卷十六「久米のさら山」一八〇）⁹

「衣がへせ」（帰せ）という表現から、都に帰りたいという思いが伝わって来る。後鳥羽院の「ふるさと」から離れる際の歌と同じように、後醍醐天皇も都への憧れや郷愁の様子を表したことが窺える。

また、吉野行宮に滞在している時の一首を挙げる。（『新編国歌大観』第一巻）

⁹ 『増鏡』 「久米のさら山」前文は「さは言へど、今まで国の主にて、世をもいみじう治めさせ給へりつる名残りにやあらん、いとねんごろにのみつかふまつれり。古の御幸どもには、かうはあらざりけりとぞ、古き事知れる人々言ひ侍りける。四月一日の頃、ももしきの宮のうち思し出でられて」とある。

ここにても雲井の桜さきにけりただかりそめの宿と思ふに

（『新葉集』八三）¹⁰

「雲井の桜」は都の内裏の紫宸殿に植えられた桜を指し、吉野の行宮でも咲いたことが歌われた。また、「かりそめの宿」とは、後醍醐天皇が都に戻りたいという感情が含まれた。彼の歌は宮廷での栄華を惜しんでおり、幕府に対する憤りを秘めている（久保田 1990）。

そして、後醍醐天皇の歌には、後鳥羽院を意識した要素が見られる（君嶋 2022）。特に、吉野に滞在中の歌で南殿の桜が咲く様子を詠んだことは、朝廷の中心を意識していることを示す。また、吉野は後醍醐天皇が南朝の拠点とした場所であり、朝廷の中心を吉野に置くことで南朝の正統性を主張しようとした。さらに、吉野で「ふるさと」を詠んでいないのは、後鳥羽院と異なり、彼は自身の治世の権力を失っていないという自覚があったからかもしれない。

一方、徽宗は李煜の影響を受けた北宋の皇帝である。徽宗は対金戦争に敗れて金に連行され、最後も宋に戻ることなく亡くなった。金に向かう途中で詠んだ詞を挙げる。（唐 1980, 第二巻: 898）

燕山亭・北行見杏花	北行きて杏花を見る
裁剪氷絹	氷絹を裁ち剪る
輕豊数重	軽かに畳むことは数重なり
冷淡臙脂勻注	冷淡 臙脂を勻しいに注ぐ
新様靚粧	新様を靚粧して
艶溢香融	艶やか溢れて香を融く
羞殺蕊珠宮女	蕊珠の宮女を羞殺して
易得凋零	得易きは 凋零なり
更多少 無情風雨	更に多少ぞ 無情の風雨
愁苦 閑院落淒涼	愁い苦しむ 閑院 淒涼に落ち
幾番春暮	幾く番び 春が暮る

¹⁰詞書「芳野の行宮におましましける時、雲井の桜とて世尊寺のほとりに有りける花の咲きたるを御覧じてよませ給ける」とある。

凭寄離恨重重	凭みて 離恨 重重を寄せん
這双燕 何曾會人言語	這の双燕 何ぞ曾て 人の言語を会せん
天遥地遠	天は遥かに 地は遠く
万水千山	万水 千山
知他故宮何処	知るや 故宮は他の何処なるを
怎不思量	怎か 思量せざらん
除夢裏 有時曾去	夢の裏を除き 時に曾て去くこと有り
無拋	拋ること無し
和夢也 有時不做	夢に和ふも也た 時も做ざること有り

「離恨」は、別れを望まない想いを表す。また、「故宮」とは以前の都を指し、最後の部分で「除夢裏有 時曾去」とは夢の中で都を見るだけであり、現実のものではないことを示した。さらに、過去への郷愁や哀しみが込められて、「和夢也 有時不做」という思い出の夢が時にも全く現れないことを表す。

さらに、金に軟禁中に詠んだ詞、『眼兒媚』（唐 1980, 第二巻: 898）を挙げる。

眼兒媚

玉京曾憶旧繁華	玉京 曾て 旧の繁華を憶ふ
万里帝王家	万里 帝王の家
瓊林玉殿	瓊林 玉殿
朝喧弦管	朝に弦管を喧しくし
暮列笙琶	暮に笙琶を列ぬ
花城人去今蕭索	花の城 人去りて 今は蕭索たり
春夢繞胡沙	春の夢 胡沙を繞る
家山何処	家山 何れの処ぞ
忍聽羌笛	忍びて羌笛を聴く
吹徹梅花	吹きて梅花を徹かす

「玉京」は生活した場所を示し、「万里帝王家」「家山」は彼が統治した宋朝の国を表す。過去の繁華を回想し、現在の苦しさを表現する。また、「夢」を用いた過去を回想する点は、李煜の詞からの影響を受けている。

そして、徽宗の詞の「閑院落淒涼」や「花城人去今蕭索」は、後鳥羽院の「ふるさと」の表現と共通する要素を持っている。まず、後鳥羽院の「ふるさとのあれたる庭」（四五）と同様に、これらの描写には風景の変化や荒廃を意識した感情が投影されている。統治した地域の荒廃や変化に対する悲しみや郷愁が表現されていることが窺える。さらに、後鳥羽院も徽宗も、君主が朝廷の中心にいない状況下で政治の荒廃や都の淒涼さを意識している。「庭」という言葉は、天子が政治を行う「朝庭」という場所を指す。後鳥羽院は院政の支配者不在のため、かつて政治を行っていた場所が荒れ果てていた状況を感じ取り、その荒廃や変化に対する悲しみや嘆きを詠っている可能性がある。

これは、君主の存在が朝廷の統治や政治の安定に極めて重要であることを示し、君主の不在がもたらす荒廃とその寂寥感を表現したものである。

その一方、李煜の詞では、異なる「国」への思いが明確に表現された。彼は「鳳閣龍樓」、「船上管弦」、「雕闌玉砌」といった繁栄する場所を描写し、これらの場所は過去の南唐の栄光を追憶する。しかし、これらの繁栄は実際には「夢」の中のみ存在することが示された。このことから、李煜の意識は単に過去を懐かしむだけではなく、その繁栄は現実のものではないことを認識している。彼の詞には現実からの「逃避」というテーマが頻繁に表現され、政治的な失敗から逃れるために「夢」という架空の場所に身を置く傾向が見られる。

李煜は過去の自らの治世に戻るよりも、むしろ想像の世界に執着したと言える。そのため、彼が過去の治世に戻る意思を持っていない可能性が高いと考えられる。

5. むすびに

「ふるさと」と「国」の表現は、単に都を指すものではなく、むしろ象徴的な意味や統治領域として解釈できる。後鳥羽院の『遠島百首』における「隠岐」は権力が失われた境

界地として位置づけられ、「ふるさと」は統治の範囲内や境内地として捉えられたことである。一方、李煜の「国」は滅亡した故郷の南唐と確認できる。「ふるさと」も「国」と同様に、かつて支配権を持っていた土地全体を示し、権力の中心地に対する思い入れが含まれた。

しかし、李煜の詞には、後鳥羽院や後醍醐天皇、徽宗のような君主の意識は見られない。李煜は自身がかつての皇帝であるものの、後鳥羽院や後醍醐天皇のように朝廷の中心地や政治的なリーダーとしての思いを強く持っていない。

さらに、各時代の君主の意識については、より詳細な検討が求められる。今後の課題として、各時代の君主の文学作品や他の言葉を総合的に検討することが重要である。各時代の君主の文学的な表現や思想、意識について比較研究を行うことで、より深い理解を得ることができるだろう。

参考資料

日本語資料

石川忠久（1997）『詩経』新釈漢文大系 明治書院

岩佐正（編）（1993）『神皇正統記 増鏡』日本古典文学大系 岩波書店

梶原正昭ほか（2002）『曾我物語』新編日本古典文学全集 小学館

久保田淳・馬場あき子（編）（1999）『歌ことば歌枕大辞典』角川書店

小学館（編）（1994）『日本大百科全書』小学館

『新編国歌大観』編集委員会（編）（2011）『新編国歌大観』古典ライブラリー

（2022.2版）<http://www.kotenlibrary.com/download/kojin/>（2024年2月14日最終アクセス）

増補史料大成刊行会（編）（1965）『兵範記 二』増補史料大成 臨川書店

田村柳壺（1998）『後鳥羽院とその周辺』笠間書院

深津睦夫・君嶋亜紀（2014）『新葉和歌集』和歌文学大系 明治書院

馬嶋春樹（1975）『中国名詞選』新釈漢文大系 明治書院

村上哲見（1961）『李煜』中国詩人選集 岩波書店

『和歌文学大辞典』編集委員会（編）（2014）『和歌文学大辞典』古典ライブラリー

（2022.2版）<http://www.kotenlibrary.com/download/kojin/>（2023年12月4日最終アクセス）

中国語資料

- （清）陳廷焯『白雨齋詞話』影印（1984）上海古籍出版社
（清）康熙五十四年刊『欽定詞譜』影印（1983）中国書店
漢語大詞典編輯委員会（編）（2011）『漢語大詞典』（第二版）上海辞書出版社
唐圭璋（編）（1980）『全宋詞』中華書局
王仲聞（校訂）（2007）『南唐二主詞校訂』中華書局
姚柯夫（編）（1986）王国維『《人間詞話》及評論彙編』文史哲研究資料叢書 書目文獻出版社
臧勵蘇（編）（1999）『中国歴代人名大辞典』上海古籍出版社
周勛初（編）（2003）『唐詩大辞典 修訂本』鳳凰出版社

参考文献

- 網野善彦（1986）『異形の王権』平凡社
伊藤喜良（2016）『日本中世の王権と権威』思文閣
君嶋亜紀（2022）「後醍醐天皇配流の道行と和歌:『増鏡』「久米のさら山」試論」『大妻国文』53
久保田淳（1990）「南殿の桜」『文学』岩波書店
黒田俊雄（1975）『日本中世の国家と宗教』岩波書店
小島吉雄（1993）『増補 新古今和歌集の研究 続編』和泉書院
「新編弘前市史」編纂委員会（編）（2003）『新編弘前市史 通史編1（古代・中世）』弘前市企画部企画課
田口暢之（2021）「「実感」の題詠歌—『遠島百首』と『遠島歌合』を中心に—」『国語と国文学』98/11: 33-49.
寺島恒世（2015）『後鳥羽院和歌論』笠間書院
増田繁夫（1977）「「吉野山」と「ふるさと」:平安朝和歌史の一節」『人文研究』29巻
安田章生（1960）『新古今集歌人論』桜楓社
詹安泰（編注）（1958）『李璟李煜詞』人民文学出版社